

連載：[海外] グローバル体験

第6回 米国 仕事、家庭、地域の3つを大切にす

研究員 杉本 晴重

問われた「働き方」

昭和40年代後半、高度成長時代冷めやらぬ日本から転勤した、米国子会社での働き方は実に新鮮だった。一言で言うと、「人は何の為に働くのか」を問われた。

当時、我々日本人は完全な会社人間で朝から晩まで仕事、仕事、仕事であった。新規市場、新商品、新職場と仕事が面白くてしかたなかったし、若かったし、日本との時差もあって、早朝あるいは深夜の仕事が当たり前になっていた。

一方、現地の人は、決まった仕事をほとんど定時にこなして帰宅していた。

「なんで日本人はそんなに働くのか？ 家族はどうなっているのか？」と現地の人からは不審がられた。まさしく、エコノミックアニマルであった。

彼らは、会社を離れて、家族や友達と過ごし、教会活動や、ボランティアなど地域活動をするのが当たり前のようであった。職場、家庭、地域（社会）の三つを同時に大切にしていた。そのためにか、一旦働き出すと成果を重視し、徹底して効率を優先した。

ムダな仕事はしない。業務に対するクレームや「前の会社ではこうやっていた」等の提案も多かった。長時間の会議、過剰な資料作成は勿論、上司と決めた自分の仕事以外はやらなかった。「それは、私の仕事ではない」と言う言葉をよく聞いた。

部門間の効率を上げる

それ以来、仕事のやり方を考え直すようになった。

まず、自分がやらなければいけない（やれるではなく）仕事は何かを考え、その中でも重要度・優先度の高い仕事から始める。他人が出来る仕事は量、質を考えて、仕事の要求出力、時間、責任を明確にして分担する。等々、今、考えると当たり前の事ばかりであるが、当時は、これにより自分だけでなく、部門内、部門間の効率（生産性、時間）が上がった。現地の人との融合も図れ、関係も改善された。結果的に家族と過ごし、地域と接する時間も増えた。

日本では、今でも長時間労働問題や、心の問題、低い生産性の問題が問われているが、やはり職場を離れて、家族と時間を共有したり、自分1人の時間を持ったり、地域活動へ参加すること等が大事だ。

時間と心の余裕が出来、仕事に集中し、真に価値のある質の高い仕事出来る。将来、AIやロボットの進歩により、人の仕事のやり方と質ばかりでなく、家族や友人、地域社会の重要性が今まで以上に問われることになるだろう。

—以上—